

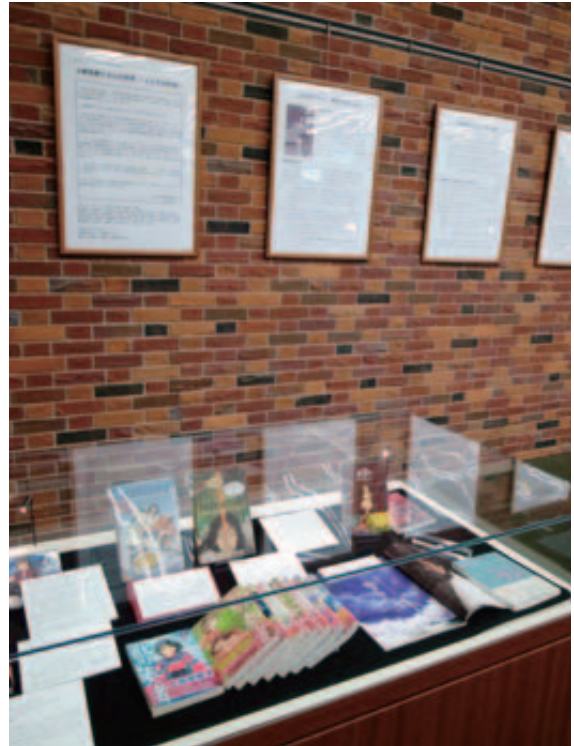
「上橋菜穂子さんの世界～人とその作品～展」報告

高橋 智美（経済学部経済学科）

2014年7月1日、立教大学池袋図書館地下1階には、上橋菜穂子氏の国際アンデルセン賞受賞を記念し、上橋氏の作品紹介やプロフィールなどを記した何枚ものパネル、そして多言語に翻訳された上橋氏の作品やほかのアンデルセン賞受賞作品の展示コーナーが設置された。この展示の実現までには、司書課程の希望者15名のメンバーの2か月に及ぶ努力があった。



池袋図書館地下1階展示スペース



展示ケース2台にはメディアミックスされたり各国語に翻訳されたりした作品群等を並べた

立教大学では2012年2月に、陸前高田市立図書館に学生ボランティアを派遣し、寄贈図書の仕分け・選定や、選定図書の分類などの作業を行った。その後も、旧図書館の書架の寄贈等をとおして、同図書館と本学教職員の交流は続いていたという。そして、2014年、本学の卒業生で、「守り人」シリーズや「獣の奏者」などの作品で知られている作家の上橋菜穂子氏の講演会を共催することになったそうである。その作業が進められていたところに、上橋氏が2014年3月に、国際アンデルセン賞を受賞するというニュースが飛び込んできた。そこで、これを記念し、司書課程の学生ボランティアが、10月に陸前高田市で予定されていた上橋氏講演会の広報のためのチラシ・ポスター作製、そして立教大学池袋図書館における特別展の準備を行うことになった。

私自身は、上橋氏の作品としては「守り人」シリーズの1作目、「精霊の守り人」を読んだことがあった。それで興味を惹かれたのと、実際に東北に赴いて被災地支援を行う以外に、何か役に立てることはないかと思っていたことから、司書課程の先生からこのお話を聞いてすぐにこの活動に参加することを決断した。

5月初めに行われた第1回全体ミーティングでは、この活動の趣旨説明が行われた。そして参加者全体がチラシ・ポスター作製、上橋氏のシリーズ・作品紹介、上橋氏が研究していた文化人類学の紹介、上橋氏の人物・執筆環境紹介、国際アンデルセン賞紹介の5つの班

に分かれた。上橋氏の作品に詳しい学生が何人もいたので、私は国際アンデルセン賞を紹介する班に入った。その後、全体でのミーティングのほかに、各班での会議を通して準備を進めていった。

私の班はアンデルセン賞についての詳細をパネルで紹介し、過去のアンデルセン賞の受賞者の作品を展示することになったが、ミーティングのたびに大きな課題が幾度も立ちわだかまった。まず、英語で書かれたアンデルセン賞選考委員による上橋氏に対する講評をどのように扱うか。受賞者の作品の紹介するにあたり、どの作家の作品を重点的に紹介するか、またその選書基準をどうするか。展示スペースのどこを使わせてもらうのが一番良いか、などである。

第2回以降の全体ミーティングや班で行われた会議の中でさらにさまざまな細かい問題が発生し、講義やほかのイベントとの両立の忙しさで、正直に言うと辞めたくなくなったこともあった。だが、6回にわたる全体ミーティング、週に1、2度の頻度で行われた班ごとの会議を経て、ようやく6月末には実際の展示、パネル製作などの最終段階に入ることができた。苦労した分、完成した展示スペースを見た時には感慨も一入であった。

嬉しかったのは、7月から公開が始まってすぐに、私の友人の一人が「展示スペースのパネルが分かりやすく良かった」と話してくれたことである。試験期間が近づいているにも関わらず、頑張って作成した展示に興味を示してくれた人がいたことを知り、このボランティアに参加して本当に良かったと感じた。学部や学年、また考え方が異なる人たちと1つの目標に向かって真剣に議論を重ねることの重要性を学んだことはこの後の大学生活、さらには社会人になった後の人生にも大いに役立つのではないかと考えている。

1点だけ残念なことといえば、展示スペースに、来場者の方々が自由に書けるようなノートが置かれていたのだが、記入してくれた方がほんのごく僅かだったことだ。どんな意見でも今後の参考にしたいと考えていただけに残念だった。また、展示スペースはかなりオープンな作りでもあり、どれくらいの人数の方に見ていただいたのかもわからない。来場者数自体が少なかったということであれば、より積極的な招致活動が必要であったのではないかと考えられる。

最後になってしまったが、このボランティア活動では司書課程の中村百合子先生・上田修一先生、立教大学職員の深野毅様・小泉徹様・小林数彦様、その他たくさんの方々にお世話になった。この場を借りて、深く感謝申しあげる。